

新出の模写本「熊野懷紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」と 徳川家康における藤原定家の筆跡愛好について

Newly found copies of Kumano Kaishi and Tokugawa Ieyasu as a devotee of Fujiwara Teika's
handwriting

高橋 利郎

Toshiro Takahashi

序

平成二十四年、成田山書道美術館で「熊野懷紙」の模写本と考えられる掛幅を収蔵することとなった。懷紙には、『拾遺愚草』に収録される藤原定家の歌が二首記されている。これは、後鳥羽上皇の建仁元年（一二〇一）、熊野御幸に同道した定家が、滝尻王子で詠んだ法楽和歌であることが知られている。しかし、これまでのところ、この歌が記された定家自筆の「熊野懷紙」は確認されていない。

原本が不明であるというものの、歌題や書式などから見て、これが藤原定家自筆の「熊野懷紙」の模写本である可能性は高い。

さらに、この掛幅を納める箱の蓋表には、「権現様御筆」という墨書が見られる。すなわち徳川家康が定家の懷紙を模写したものであるという。家康は定家の書を愛好し、実際に「小倉色紙」などを

模写した遺墨が現在に伝えられている。それらとの比較において、この模写本「熊野懷紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」も家康筆である可能性がある。

本稿では、模写本「熊野懷紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」の概要を紹介し、定家が揮毫したと考えられる原本を想定すると同時に、家康の定家愛好と、この懷紙の家康自筆の可能性について検討することにしたい。

第一章 模写本「熊野懷紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」について

第一節 現状と伝来

まず、模写本の現状について確認することにした。

本紙は素紙で、縦三十三・八センチメートル、横五〇・四センチ

メートル「図一」。三段表具の掛幅装で、天地には薄茶地雲龍丸文金紗、中廻しと風帯には紺地雁文金欄、一文字には茶地丸龍文金欄を用いている。軸先は象牙の切軸。透過光で確認すると、折れの強い部分に数か所補紙があてられている。このことから、少なくとも一度、装幀が改められていることがわかる。箱は桐の印籠箱で、蓋の四方に丁寧な面取りが施され、全体に透明な漆が掛けられているようである。蓋表には「権現様御筆そめしあきを」と墨書されている「図二」。箱書きの書風も含め、全体的に時代を感じさせる仕立と言えるだろう。箱には、「東照公筆定家卿熊野懷紙写 壹幅伯爵酒井忠興君」と墨書された短冊状の紙片が掛幅とともに納められる「図三」。幅を包む絹布には丸に三ツ葉葵の紋が染め抜かれ、左端にはやはり「東照宮御筆そめし秋を」という墨書が見られる。本文は次の通りである。端作と位置、題をそれぞれ一行に、二首の歌は三行に書く。行割もそのまま示すことにする。

詠河邊落葉和調

左近権少将藤原定家

そめしあきをくれぬと

たれかいはたかはまたな

みこゆるやまひめのそて

旅宿冬月

いはなみのひ、きはいそく

たひのいほをしつかに

すくるふゆの月かけ

紙片に記された「伯爵酒井忠興」は、十代目姫路藩主酒井忠邦（一八五四—一八七九）の子で、園芸家として知られた酒井忠興（一八七九—一九一九）。明治二十年（一八八七）に母、文子のあとを受けて伯爵に叙せられている。この紙片は、叙爵以降、歿年までの間に、いずれかの展覧会などに貸し出しされた際に付されたものである可能性がある。

酒井家の蔵帳には、忠興の在世中の明治三十五年に書写された旨の奥書を有する「姫路酒井家宝器明細簿」がある「註一」。親本は天保三年（一八三二）から九年にかけて、五代目藩主忠学（一八〇八—一八四四）が編集したものだという。乾坤二冊に分かれた坤の「書画門」の「書之部」には、「家康公筆」として六件の遺墨が列挙されている。このうちの一件に「そめしあきを 小横物一幅」という記載がある。「そめしあきを」は「そめしあきを」の誤写だろう。この一幅が、ここに掲げた模写本「熊野懷紙（河辺落葉・旅宿冬月）」に該当するものであるとすると、少なくとも忠学の時代から忠興の時代まで、これが姫路酒井家に所蔵されていたものであることがわかる。

ところで、茶の湯をはじめ書画に通じた酒井忠以（一七五六—一七九〇）は、姫路藩の二代目の藩主である。酒井抱一（一七六一—一八二九）はその実弟。宗雅と号した忠以には、『逾好日記』（三卷）と称される茶会記が遺されている〔註2〕。これには一一二の自会記と六十六の他会記が収められ、それぞれの会における道具立ても細かく示される。しかし、この会記に家康の書を見出すことはできない。また、藤原定家の遺墨としても同様である。粟田添星が宗雅時代の酒井家の蔵帳を再現すべく編集した『酒井蔵帳』にも、この幅に関する記述は見られない〔註3〕。この幅は、宗雅の時代以降に酒井家に入庫し、美術品の移動が活発になった近代を迎えて巷間に出たものであると考えられる。

第二節 原本の想定とその位置付け

「河辺落葉・旅宿冬月」の二首は、藤原定家の自撰家集『拾遺愚草』下の「神祇」の部にそれぞれ題とともに収められている〔註4〕。神祇の部三十四首のうちには、他にも熊野に関連する歌が十七首見られ、建仁元年（一一〇一）、後鳥羽院の熊野御幸に供奉した定家が、熊野詣にひときわ関心を抱いていたことがわかる。

「熊野御幸記」によれば、この二首の歌が詠まれたのは、この年の十月十三日のことである〔註5〕。四十歳の定家は、十月五日か

ら二十六日までの間、後鳥羽上皇の熊野御幸に随伴した。本宮へと向かう途中の十三日、院の一行は田辺にいた。前日、院も定家もこの田辺で潮垢離を行い、十三日に秋津王子、稲葉根王子などを経て岩田川を渡った。ほどなく鮎川王子に至って川辺の美しい紅葉を目にしながらかん尻に着いた。ここで先の懐紙の和歌が詠まれたのである。「熊野御幸記」には、歌会の様子が次のように記される。

入夜、給題、使者遅来云々、即詠之持参、如例、披講之間、参入、読上了退出、参此王子、帰宿所。

河辺落葉

そめし秋をくれぬとたれかいはた河

またなみこゆる山姫のそて

旅宿冬月

たきかはのひ、きはいそくたひのいほを

しつかにすくるふゆの月かけ

夜になって題を賜り、岩田川の川辺の美しい紅葉や旅路の月夜を早々に詠み上げて、院の御所に持参した。講師は定家、稲葉根王子への奉納歌である。二首目の初句は、「熊野御幸記」に「たきがはの」とあるのに対して、この懐紙には「いはなみの」としている。『拾遺愚草』も同様に「いは浪の」として、懐紙の歌と共通していることがわかる。

定家はこのほか、四日前の十月九日に藤代王子で「深山紅葉・海辺冬月」、翌日の十月十四日には「峯月照松・浜月似雪」の歌を遺し、これらを揮毫した和歌懐紙が現存している。また、大正十三年（一九二四）六月十六日に開催された売立ての目録、『市内某家所蔵入札目録』（東京美術倶楽部）に掲載される「深山嵐・滝間月・寺落葉」も、定家自筆の「熊野懐紙」である可能性が指摘されている〔註6〕。

「熊野懐紙」のうち「深山紅葉・海辺冬月」（個人蔵・図四）は、本紙が縦二九・九センチメートル、横四七・〇センチメートルの掛幅装で、重要美術品に認定されている〔註7〕。題と位置をそれぞれ一行に、歌を三行に書く。行間や行頭は比較的整っているが、句切れなどは気にせずに行替えが行われている。二首懐紙の場合、歌を五七、五七、七というふうに行替えをするのが通例であるが、現存する「熊野懐紙」を通覧する限り、定家に限らず、必ずしもこの書式が守られているわけではない。

穂先のよく効いた筆を用いたものと見え、ふつくと丸みのある筆画と毛筋ほどの伸びやかな線とが好対照を成している。横画を水平に取り文字を扁平に作ると同時に、連綿を抑えたいわゆる定家様の書風が顕著な懐紙である。

一方の「峯月照松・浜月似雪」（京都・泉屋博古館蔵、図五）は、

縦三一・四センチメートル、横四九・三センチメートルの紙本で掛幅装。これも題と位置をそれぞれ一行に書くが、一首目の第一行を五字で行替えして二行目に進み、最後の「ける」はやや左にずらして収める。二首目は行頭を次第に下げ、三行目は文字から文字への連綿にしたがって、行の中心軸を右へと送っていく。「深山紅葉・海辺冬月」よりもさらに書式に拘泥しない、散らし書きに近い構成である。

紙面がやや荒れていて、先の「深山紅葉・海辺冬月」と単純に比較することはできないが、いくぶん肉太の線は、禿筆を擦りつけるようにして書いたように見える。少なくとも表現の上から見れば、五日前の「深山紅葉・海辺冬月」とは使用した筆が異なるものと想像される。筆画の左右への振幅は控えめで、文字から文字へと自然に連綿していく。一文字ずつ丁寧に書き進めた「深山紅葉・海辺冬月」よりも肩の力を抜いて書写しているようである〔註8〕。

また、「深山紅葉・海辺冬月」の位置には「左近衛権少将藤原定家」と記されるのに対して、「峯月照松・浜月似雪」には「左近衛少将藤原定家」と「衛」の字が略されている。また、「深山紅葉・海辺冬月」では行書体で書かれる「将」「藤原」の字を、「峯月照松・浜月似雪」ではかなりくずして草書体にする。これらを、禿筆の使用や書式にこだわらない構成、自然な連綿とあわせ考えると、

「峯月照松・浜月似雪」は、やはり、「深山紅葉・海辺冬月」よりもいくらか楽に構えて執筆された懐紙と推察される。

この現存する二件の定家自筆の「熊野懐紙」と、模写本「熊野懐紙（河辺落葉・旅宿冬月）」とを比較してみると、この模写本は、性質的に「峯月照松・浜月似雪」に近似しているようである。題の「葉」、位署の「藤原」が草書体にくずされている点、位署の「左近衛」の「衛」字が省略されている点、肉太な筆画などが共通点として挙げられよう。

全体的に、定家独特の書風を捉え、題の冒頭「詞」や第二首の三字目「な」に明らかな補筆のあとが見られるように、慎重に筆を運びながら模写しようとする意識が見られる。その半面、一文字ずつ定家の自筆懐紙と比較すると、原本の字形を下敷きにしながらも、模写した人物自身の個性が勝っているもののように思われる。また、署名の「藤」のくずしは正確とは認めがたく、原本を傍らにしなから全体的な形を印象的に写し取るに留まり、筆路までは明確に追いつけなかった可能性があるのでないだろうか。

現在、「河辺落葉・旅宿冬月」の原本を見ることができない以上、推測の範囲を出ないが、この原本は、「峯月照松・浜月似雪」に共通する書写態度で揮毫されたのだろう。構成や文字の使用は、この模写本の通りだったのではないだろうか。しかし、双鉤填墨の

ような精巧な搦模本というよりは、書写した人物の学書の一助、あるいは過眼した名跡の印象を留めるための臨書というべき模本であると考えられる。

第二章 徳川家康の定家愛好

第一節 徳川家康における藤原定家の書跡愛好

箱書では、この懐紙の筆者を徳川家康とする。家康が定家の書を愛好したことはこれまでも指摘されている〔註9〕。ここで改めて史料や家康の所藏品などから、その定家の書跡愛好の実態を確認することにしたい。

まずは、慶長十六年（一六一一）から元和元年（一六一五）にかけて、駿府城に隠棲した家康の動静を記録する「駿府記」に見られる、定家の書に関する記述を列挙する〔註10〕。

慶長十九年七月十日

冷泉中納言從江戸帰府、出御前、定家卿歌書被為見、歌道御雑談、

同七月十四日

今日定家自筆伊勢物語從幕下被進、土井大炊助持參、彼本奥書等、道春於御前読之、右本者、後土御門院御物、能登畠山入道拝領、其後転伝、三好修理大夫長慶所持之、三好没落以

後泉州堺に有之、細川幽齋玄旨求之、其後尾州下野守殿忠吉
從幽齋所望、下野殿御死去後、被進幕下、

同七月十五日

公家衆諸士出仕、彼定家自筆本伊勢物語、日野唯心飛鳥井冷
泉令見給、

同七月十六日

今日冷泉為満定家筆廿六人歌撰一冊持參備御覽、定家自筆歌
書、冷泉家重宝雖多之、殊勝筆跡云々、(以下割り書き)一
人之歌十首宛有之、其内定家用之給歌、十首之内二首宛、切
薄砂子以付紙押之云々、歌書でつてうとぢ、唐組打交糸閉之
云々、本者四半本也云々、

同八月九日

今日尊応榮雅兩人奥書之定家古今集、逍遙院称名院筆三代集、
冷泉并公家衆令見給、冷泉申云、古今集頗不審云々、

同八月十日

公家衆金地院令見弘法心経、道風佐理行成之手跡、尊円一卷、
逍遙院、称名院筆伊勢物語二部、同源氏物語系図二卷、并定
家筆新勅撰等給、諸人驚目云々、

慶長二十年閏六月二十三日

今日政宗持参定家自筆古今集、被備御覽、召冷泉中納言為満

令見給、政宗以日野唯心言上云、於御意入者進上申度由、再
往被申之、雖然陸奥守可為翫弄之慰之由被仰、令返之給云々、

同七月九日

今日冷泉為満参上、仍令問源氏物語奥入之事給所、定家自筆
奥人所持之、而揚名介之処、註釈之上、却而銷之云々、

これらの記録の上で、家康が所持していた定家の書は、後土御門
院旧蔵の「伊勢物語」、青蓮院尊応と飛鳥井榮雅の奥書のある「古
今集」、「新勅撰和歌集」、「源氏物語奥入」ということになるが、
「古今集」については、冷泉為満が「頗不審」と言い、真偽に疑問
があったようである。

また、「定家卿歌書」、箔や砂子で裝飾された料紙を用いた「廿六
人歌撰」、粘葉装の「定家自筆歌書」の三件は、冷泉為満が所蔵す
るものである。さらに、伊達政宗(一五六七—一六三六)所蔵の
「古今集」も過眼している。家康がこの「古今集」を気に入れば、
政宗は献上しようという心づもりでいた。しかし、家康はこれを政
宗のもとに留めるよう申し下している。

また、家康の歿後、その遺言状をもとに徳川義直(一六〇一—
一六五〇)に譲られた遺品を列挙した『駿府御分物御道具帳』には、
「恋すてふの色帟 壹幅」、「定家之古今二冊」の二件の記述が見ら
れる。このうち、「恋すてふの色帟」は、名古屋・徳川美術館に所

蔵される藤原定家「小倉色紙（こひすてふ）」に該当する「図六」。
『台徳院殿御実記』卷十七の慶長十六年（一六一一）十二月十五日
の記事には、島津義久（一五三三—一六一一）の遺物として、「小
倉黄門定家卿の色紙并葉茶壺」が家康のもとにもたらされたことが
記される「註12」。「恋すてふの色昏」との関連を決定付けることは
できないが、このようにして、献上や形見分けなどによって定家の
筆跡が家康に譲渡されていたことがわかる。

このほか、定家自筆の書状「山門状」一幅と「安元御賀記」一冊
も家康から義直に譲渡され、同じく徳川美術館に現存する「註11」。

茶道具の蒐集に執心した武家は少なくないが、家康は、さほどこ
れに執着しなかった。定家の書についても熱中して蒐集したという
わけではないようだが、「廿六人歌撰」の筆跡について、「冷泉家重
宝雖多之、殊勝筆跡」というように、詳細にその書きぶりを観察し
ていた様子が窺える。これらの記録から、家康が少なからず定家の
書に関心を抱いていたことが理解されよう。

第二節 冷泉為満との交流

家康の定家愛好の記録を追っていくと、かなりの頻度でそこに冷
泉為満という人物が介在していることに気づく。

為満（一五五九—一六一九）は、為益の子として生まれ、父の死

に伴って十一歳で家督を継いだ。定家に連なる冷泉家は、歌の家と
して知られている。天正十三年（一五八五）、為満は義兄の山科言
経とともに正親町天皇の勅勘を蒙り摂津に居を移した「註13」。

その状況から脱するために重要な役割を担ったのが家康であると
言われる。文禄三年（一五九四）九月二十日、為満は、山科言経に
伴われて、まだ有力な大名の一人だった家康のもとを訪れている
「註14」。

為満ト共ニ家康ヲ訪フ。為満定家筆三代集及び後土御門後柏原
後奈良三天皇勅書冷泉為家讓状等ヲ携ヘ家康ノ覽ニ供ス。為満

家康ニ定家筆僧正遍昭家集ヲ贈ル。家康為満ヲ召抱ヘント言フ
為満は、冷泉家に襲蔵される古典籍のうち、「定家筆三代集」「後
土御門後柏原後奈良三天皇勅書」「冷泉為家讓状」などを覽に供し、
定家筆の「僧正遍昭家集」を献上した。家康はこれをことのほか喜
び、為満を召し抱えると伝えた。こうした人間関係が奏功して、慶
長五年（一六〇〇）、為満は勅勘を解かれたのである。慶長十一年
には京に土地を与えられ、屋敷を構えることもできた。

冷泉家の秘筐に伝えられてきた定家の筆跡が、苦境にあった為満
と家康とのあいだを強く結び付け、冷泉家を救うことになったので
ある。

山科言経に連れられて家康との知遇を得た為満は、その後もこと

あるごとに家康のもとに出向いている。慶長八年二月十二日、家康が將軍宣旨を受ける場にも為満は言経の子、山科言緒らとともに立ち会った〔註15〕。再び「駿府記」から、家康と為満との交流の記録を示すことにしたい。

慶長十六年十月一日

山科少将言緒、舟橋式部少輔秀賢、冷泉侍従為満自京都着府、則出御前、

同十月二日

今晚日野唯心、山科少将、舟橋式部、冷泉侍従、両長老於御前賜饗食、茶後出御、

同十月六日

山科言緒、舟橋秀賢、冷泉為満各黄金一枚被物二領宛賜之、同十月二十一日

今日於本城南庭有御能十一番、少進法印、金春大夫、金剛、宝生等為之、則召近侍令見之給、山科、冷泉、舟橋、侍將軍家之御傍而見之、

慶長十七年五月五日

飛鳥井中納言雅庸、冷泉三位為満、舟橋式部少輔秀賢昨日着府、出御前有御雑談、

同五月八日

日野唯心、水無瀬一斎、飛鳥井雅庸、冷泉三位為満、土御門左馬久脩、舟橋式部少輔秀賢出仕、各賜鶴之羹、有倭漢儒積之御雑談、

同六月一日

日野唯心、水無瀬一斎、冷泉三位、土御門左馬權助、舟橋式部少輔、在府諸武士出仕、已刻出御、各賜富士山水云々、

同六月十六日

嘉定如例、日野唯心、水無瀬一斎、飛鳥井中納言、冷泉三位、土御門左馬權助、舟橋式部少輔出仕、在府諸武士伺候、

同六月十七日

冷泉、舟橋賜御暇、銀二十枚綿子百把帷子五領宛被遣之、是依院御惱所上洛也、

慶長十九年三月二十七日

冷泉中納言為満參府、古今伝授為可被得也云々、

同四月五日

摠持院法華經廿八品歌廿八首献之、於御前冷泉金地院令説之、同四月十四日

於三之丸御能九番、五山長老衆、冷泉黃門見物、

同六月十七日

冷泉中納言弄花持參捧御前、是者頃日自御前可校合之由被仰

本也。

同七月十八日

冷泉為満為家御自筆仮名遣左枚右枚書様書物、於御前持參備御覽云々、

同八月一日

如例出御前殿、諸士出仕、大御所御長袴、南光坊、伝長老、東大寺衆、日野唯心、飛鳥井雅庸、冷泉為満、唐橋已下出仕、及御雜談云々、

同八月七日

山崎宗鑑自筆廿一代集、日野唯心飛鳥井冷泉令見給云々、

同十二月五日

六条中納言有広、冷泉中納言為満、山科宰相言緒自京參着、今日御目見、

慶長二十年閏六月十七日

冷泉中納言獻大比叡歌合一冊、

同閏六月二十一日

飛鳥井、冷泉、六条、烏丸中納言、広橋弁、山科、難波、烏丸弁以下各參上、而則為御供（以下割り書き）昵近公家衆と号す

同七月五日

大御所南殿出御、源氏物語抄、公家衆被成配分、仮名を可付由被仰、日野、三条、飛鳥井、冷泉父子、烏丸也、

同七月十九日

中院中納言通勝御礼、伝長老、日野唯心、冷泉中納言為満取成被申云々、

同七月二十九日

於御前敷奇屋、令中院読源氏物語帚木卷給、金地院、冷泉伺候云々、

為満は、飛鳥井（雅庸）、六条（有親）、烏丸（光広）、広橋（兼賢）、山科（言緒）、難波（宗勝）、烏丸（光賢）らとともに「昵懇公家衆」の一人に数えられ、家康に近い公家としてその信頼を得た。「註16」。為満は、こうした公家衆とともに家康のもとに頻繁に参向した。

なかでも目を引くのは慶長十九年三月二十七日の記事である。

この日、為満は、家康に古今伝授を行うために駿府城に参向した。公家社会を中心に行われてきた古今伝授は、後水尾天皇も自ら継承した。政権を握った家康は、古今伝授を受けることで、文雅の世界においても天皇に並んで王権の所在を示したのである。「註17」。

家康は、時折、所蔵の典籍を為満らに見せ、為満もまた家蔵の典籍を家康の覽に供したり、ときに献上したりもしている。家康は冷

泉家歴代の蔵書に関心を示すと同時に、『源氏物語』やその注釈書、各種の歌集などの古典籍を媒介として為満と交流したのである。家康は為満の教養を評価し、ともに能を見物したり、折々の行事に招いたりしている。

為満は定家様の書をよくした人物でもある。家康は、定家の書に直接触れることによってその書風に親しむと同時に、為満の筆跡を通して定家様に馴染んでいったのではないだろうか。徳川義宣氏が指摘する通り、家康と同じ時期に定家様を得意とした能書は、冷泉家の人物を除くと、小堀遠州の父、小堀正次が見られる程度である〔註18〕。

家康も継承した古今伝授には、和歌を書写することも含んでいると考えて大過ないだろう〔註19〕。後述するように、家康が藤原定家筆「古今名所」を抜き書きする際には、内容のみならず、その書風をも取り入れている。冷泉家が歌道を家学として守ってきたことよって、定家様という書流を継承してきたように、為満から古今伝授を受けた家康もその継承者としての資格を有していたと言える。定家の歌学を受け継いだ冷泉家の当主である為満から古今伝授を受けた家康が、定家の書風に格別の意識を抱いていたことは想像に難くない。

その一方で、家康における定家の書風の受容は、冷泉家の能書と

は異なり、通常の書写活動において定家の書の型をそのまま踏襲するものではない。

第三章 家康の定家書風の受容と模写

第一節 定家の筆跡の臨書

家康は、定家の書を所蔵したり、閲覧したりしただけではなく、実際に自らの書風に取り込んでいる。徳川義宣編『徳川家康真蹟集』には、現在、原本を確認することのできる臨書が三種、徳川氏が臨書の可能性を指摘する遺墨が二種収録されている。

一件は、先に紹介した藤原定家筆「小倉色紙（こひすてふ）」の臨書である〔図七〕。徳川美術館に所蔵される家康の臨書は、金銀泥で洲浜に松を描いた縦二〇・五センチメートル、横一九・二センチメートルの料紙を用いている。「ひとしれす」の「す」は、原本が変体仮名の「春」で書かれているのにもかかわらず、「す」を使用している。それを除けば、行割も含めて比較的原本に忠実に書き進んでいると言えるだろう。ただし、字形や筆意は原本と異なる点も多く、料紙もやや大ぶりであることから、精巧な揚模本という性質のものではなく、家康自身の学書に資する臨書と見るべきである。

さらにこれと同じ「小倉色紙」を臨書した遺墨（個人蔵、紀伊徳川家伝来）が一件、また、前半の二行だけを臨書した遺墨（個人

蔵)も一件現存している。前者では「たちにけり」の「に」を脱落している。これらもまた徳川美術館所蔵の幅と同様に、家康の筆癖が勝った臨書である。家康が愛蔵した「小倉色紙」を何度も手習いの手本にしていたことがわかる〔註20〕。

「小倉色紙(こひすてふ)」と同様に、家康が所持した「安元御賀記」についても、その冒頭半丁分の臨書が残されている(静岡・宝台院蔵、図八)。

後白河法皇の御賀の次第を藤原隆房が記録した本を、定家が書写した「安元御賀記」は、縦一七・一センチメートル、横一五・五センチメートルの枡形本である。これに対して、家康の臨書は縦二五・八センチメートル、横一七・四センチメートルと原本より縦長で大ぶりの紙面である。最後の「て」の字は、本来であれば原本に準じて、次の行に書くべきところだが、前の行に続けて一番下に書き入れている。書き進んで行ったところで用意した料紙に書ききれなかったためだろう。

また、「歌枕覚書」(茨城・徳川博物館蔵、図九)は、天理大学附属天理図書館に所蔵される藤原定家筆「古今名所」を部分的に抜き書きしたものである。縦一六・六センチメートル、横一六・二センチメートルの枡形本に二段に書く原本に対して、家康は縦三〇・二センチメートル、横二二・三センチメートルの料紙に三段に書く。

体裁は異なるが、それぞれの名所の名称は、原本の順に記載されていて、仮名の使用も書きぶりもほぼ定家の筆跡に倣っている。冷泉為満から古今伝授を受けたことからわかる通り、家康は歌学に少なからぬ関心を抱いている。ところどころに合点が施されていることから、和歌に対する熱意が垣間見られる。この臨書は、テキストと筆跡の両面から冷泉家の歌学を学ぼうとする家康の姿勢をよく示している。

これらの、現在、原本を確認できる三種の臨書のほか、『徳川家康真蹟集』に掲載される「拾遺愚草手習」と「僧正遍昭集手習」も、定家の筆跡をもとに臨書した遺墨である可能性が高い〔註21〕。

「僧正遍昭集手習」〔図一〇〕のもとになった写本について、徳川義宣氏は、文禄三年(一五九四)に冷泉為満が宇喜多秀家(一五七二—一六五五)の求めに応じて『三十六人家集』中の『僧正遍昭集』の末尾部分を切断して進上したものが、やがて家康の手に渡ったのだろうと推測している〔註22〕。宮内庁書陵部に所蔵される「御所本三十六人家集甲本」の「僧正遍昭集」の奥書には、「此二枚者宇喜多宰相依所望進之也、文禄三甲午七月八日羽林郎藤判」とある。これは書陵部蔵本の筆者が親本の記述をそのまま筆写したものとみられる。その親本の奥書は「羽林郎藤」すなわち冷泉為満が書写したもので、「二枚」は為満から宇喜多秀家に贈られたことがわ

かる。

前述した通り、この直後の文禄三年九月二十日、為満は家康に「僧正遍昭家集」を献上している。これが、先の「二枚」を切り取られた「僧正遍昭集」とどのような関係にあるのか、具体的には知り得ないが、あるいは同一の写本とも考え得るのである。とすると、宇喜多秀家に割愛した「僧正遍昭集」も藤原定家の手になるものであった可能性がある。

家康の「僧正遍昭集手習」に目を転ずると、「安元御賀記」や「歌枕覚書」の書風に近く、定家自筆本を臨書したものと考えても不自然はない。

そして、模写本「熊野懷紙（河辺落葉・旅宿冬月）」と密接な関係にあると考えられるのが「拾遺愚草手習」である〔図一〕。『徳川家康真蹟集』に掲載される遺墨は、昭和四十九年の即売会に出品されたのち所蔵先が不明となったというが、それまでは紀伊徳川家の徳川頼貞（一八九二―一九五四）が所持していた〔註23〕。

縦二八・六センチメートル、横十四・六センチメートルの素紙に『拾遺愚草』所収の「河辺落葉」の歌を三行に書く。料紙の寸法こそ異なるものの、模写本「熊野懷紙（河辺落葉・旅宿冬月）」の一首目と全く同じ仮名遣いと構成である。この「拾遺愚草手習」は、徳川義宣氏が解説中に示唆している通り、定家の筆跡の臨書である。

「小倉色紙」と同様に、家康は何度かこの「熊野懷紙」の臨書を試みたのだろう。

ところで、家康は自筆の和歌懷紙を遺している。文禄三年（一五九四）二月に豊臣秀吉の吉野詣に際して催された、兼題の歌会のため揮毫された懷紙である。「吉野懷紙」（宮城・仙台市博物館蔵）は、この日に参会した二十人分の懷紙を三巻に仕立てたもので、家康の懷紙は第二巻の冒頭に収められる〔図二〕。五首の歌は、たつぷりと豊かな線で、懷を狭く取りながら、からみ合うように一気呵成に書き進められている。家康の自筆として認められる遺墨として、また、日本書道史の上でもほかに例の少ない特徴的な書風といえるだろう〔註24〕。家康に三十年以上遅れて誕生する、烏丸光廣（一五七九―一六三八）と二脈通じる表現である。

この懷紙が書かれた文禄三年は、家康が冷泉為満の来訪を受けた年である。この懷紙を全体的な印象で捉えるのであれば、いわゆる定家様の、単体で訥々と筆を進める特徴は見られない。しかし、部分的に文字を追っていくと、これまで見た家康の臨書にも共通する個性が存在していることがわかる。このことから家康は、定家の書に傾倒していくのである。

家康が定家の筆跡に臨む態度は、総じて精巧な模本制作を目的とするのではなく、自らの書風に引き寄せた手習いというべきもの

である。

『万宝全書』に収録される『本朝古今名公古筆諸流』の「定家流」の項目には、為満をはじめとする冷泉家歴代や、定家様を得意とした小堀遠州ら二十九人が列挙されているが、ここに家康の名は見えない。「定家流」の書風が、意識的に定家の書風を再現することによって成立しているのに対して、家康は定家の書風を愛好しながらも、おおらかに構えて自らの書風に取り入れている。数多くの定家の遺墨に親しむと同時に、歌を媒介に為満と交流した家康は、極めて自然に定家の書の影響を受け入れていったのである。

第二節 模写本「熊野懷紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」における家康自筆の可能性

ここで改めて、模写本における徳川家康の自筆の可能性について検討することにした。

前述の通り、『徳川家康真蹟集』に掲載される「拾遺愚草手習」とこの懷紙の一首目の書きぶりは、かなり似通っている。定家自筆の「熊野懷紙」の模写本と考えられることから、双方ともに原本に忠実に書写しようという意志が働いていることは容易に想像されるが、定家の真跡との比較から、忠実に模写し得たものとは考え難い。臨書した人物の筆跡の特徴が如実に表れていて、特に「あ」「を」

「は」「ゆ」「ま」などの文字に注目すると、その傾向は両者に共通する。いずれかと言えば、「拾遺愚草手習」の方が筆勢に富むように見えるが、料紙の大きさや紙質の違い、また、書写した時期の違いに起因するものと言えるだろう。この二件は、同筆の可能性が高いように見受けられる。

徳川義宣は「拾遺愚草手習」を家康の自筆としているが、これには署名がない。

そこで、試みに『徳川家康真蹟集』で家康自筆とされる書跡のなから、家康の署名のある書跡の文字を一部抽出して模写本「熊野懷紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」の文字と比較した「表1」。また、署名のある書跡が書状に偏ることから、署名はないものの徳川義宣が真跡として扱う短冊や色紙からも同様に文字を集めた「註25」。

「を」「堂」「者」「ま」「見」「ゆ」「の」「て」「す」「け」などの特徴は三者に共通するものと見ることができ。また、「和」の第一画目を点に作る特徴は、定家の和歌懷紙には見られない傾向である。模写であるために字母が限定され、字形も原本の制約を受けているが、かなり家康の自筆の特徴が表れていると言えるだろう。文禄三年の「吉野懷紙」のころから定家の書へと傾倒する傾向が見られ、殊に晩年の慶長・元和期の筆跡と模写本とは線質などを含めて共通点が多い。これは家康が古今伝授を授かった時期とも重なりあう。

このような臨書を通して、家康の日常的な書風が、定家の書に共通する趣を内包するようになったといえるだろう。

また、家康は、後鳥羽上皇、寂蓮、藤原家隆の三人の「熊野懐紙」を一具にしたものを所蔵していたことが知られ、『駿府御分物御道具帳』にもその記録が残る〔註26〕。これは幕末まで尾張徳川家に伝来し、現在は京都・陽明文庫に所蔵され、国宝に指定される。後鳥羽上皇の懐紙は、定家も供奉した建仁元年十月九日のもの、寂蓮と家隆の懐紙はその前年の熊野御幸に際して揮毫されたものであるとみられる〔註27〕。定家の筆跡と同時に、一連の「熊野懐紙」にも関心を抱いていたことが理解される。

家康が数多くの定家の筆跡を過眼していたことや、所蔵していたことを勘案すると、定家自筆の「熊野懐紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」を臨書する動機は十分存在していたものと考えられる。さらに、少なくとも二度にわたってこれを臨書していることからすれば、その原本が家康の手元に所在していた可能性もあるのではなからうか。伝来や、家康の定家愛好の軌跡などを考え合わせると、この模写本「熊野懐紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」は、徳川家康の自筆と推定することができる。

結

この模写本「熊野懐紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」は、大きく分けると二つの観点から貴重な遺墨と言えよう。

一点目は、現存を確認することができない藤原定家の「熊野懐紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」の原本をこれによって想定することができる。第三章第一節で「小倉色紙」の原本とその臨書などを確認したように、家康のこのほかの定家の筆跡の臨書の姿勢から推測すると、行割や仮名の使用はもとより、書きぶりにいたるまで原本に忠実である可能性が高い。かつて、「峯月照松・浜月似雪」の懐紙は、陽明文庫に所蔵される近衛信尹の模写本によってのみその存在が知られていた。原本の所在が不明である以上、近世初期の模写本は一定の価値を有すると言える。

二点目は蓋表の記述の通り、この懐紙が徳川家康筆である可能性が高いこと。家康の定家愛好は、その筆跡のみならず和歌への関心とも重なり合うものであり、これは宮廷文化の受容と継承を背景とする文化戦略と捉えることもできる。また、家康と定家の書跡との接点にはしばしば冷泉為満が介在しており、冷泉家の書法を、古今伝授をはじめとする歌学ともに家康が修得した面もあるものと思われる。

家康に少し遅れて定家様を盛んに用いるようになる小堀遠州がよく知られるところであるが、家康の定家愛好は、定家の子孫である

冷泉家を除けばかなり早い時期に属するもので、近世の定家の筆跡愛好の起点を成すものと考えられる。これに先んじて武野紹鷗が定家筆「あまの原」の色紙を茶席に用いたことが知られ、定家の筆跡が再評価されていたことがわかる。他方、実際の書写活動に定家の書風を取り込むようになった初期の人物として、家康を挙げることでできるのである。この点においては、実権を握った家康の筆跡が、周囲の人物の書に関する志向に影響を与えた可能性も視野に入れる必要があるのではないだろうか。

註

- 1 東京大学史料編纂所に所蔵される『姫路酒井家宝器明細簿 乾・坤』は、『姫路美術工芸館紀要2』（射矢真紀解説、姫路市書写の里・美術工芸館、平成十三年）に翻刻されている。同書一四八頁。
- 2 『遡好日記』（三巻）は、栗田添星『酒井宗雅茶会記』（村松書館、昭和五十年）に翻刻されている。本稿ではこれを参照した。
- 3 栗田添星編集の『酒井藏帳』は、『酒井宗雅茶会記』のほか『茶道古美術藏帳集成』（小田栄作編、国書刊行会、昭和五十二年）に収録されている。
- 4 『訳注藤原定家全歌集』上巻（河出書房新社、昭和六十年）、歌番号二七二九河邊落葉「そめし秋をくれぬとたれか岩田河まだ浪こゆる

山ひめのそで」、二七三〇旅宿冬月「いは浪のひゞきはいそぐたびのいほをしづかにすぐる冬の月かけ」。

- 5 この建仁元年の熊野御幸については、その詳細な旅程を藤原定家が自筆で「熊野御幸記」（東京・三井記念美術館蔵）に遺している。三井記念美術館・明月記研究会編『国宝熊野御幸記』（八木書店、平成二十一年）に全体が影印され、全文が翻刻されると同時に現代語訳と注釈が付されている。本稿では「熊野御幸記」の記事に関して、これを参照し、引用した。十月十三日の記事は十五・十六頁、四十三・四十四頁。

6 兼築信行「熊野御幸における定家の和歌」（前掲『国宝熊野御幸記』所載）一七七―一七八頁。

- 7 定家自筆の「熊野懷紙」については、詳細な実見調査に基づいた、古谷稔『中国書法を基盤とする日本書道史研究』第四章「藤原定家の書とその周辺」に詳しい。「深山紅葉・海辺冬月」、「峯月照松・浜月似雪」について、主にこれを参照し、公家と武家文化調査委員会編『熊野懷紙』（霞会館、平成十八年）を補助的に用いた。
- 8 久曾神昇は、「熊野懷紙」のうち、正治二年（一二〇〇）十二月三日に切目王子の和歌会で揮毫された「遠山落葉・海辺晚望」の藤原公経（一一七一・一二四四）の懷紙が二件存在することを挙げ、草稿と浄書本とが存在するとしている（『仮名古筆の内容的研究』四

二六・四二七頁、ひたく書房、昭和五十五年)。兼築信行もこれを引用し、この「峯月照松・浜月似雪」が下書きであった可能性もあることを示唆している(「熊野御幸における定家の和歌」一七八頁)。

9

徳川義宣は、『徳川家康真蹟集』(角川書店、昭和五十八年)の総論で、家康が定家の書を所持し、臨書を繰り返した例を挙げたうえで、「定家様が寛永期に盛んとなったのも、それを家康が習ひ学んだが故であり、その始祖は小堀遠州と見るより、むしろ家康と捉へるべきではないかと考へられる」と述べる。これと同様の論が「家康の書：現はれた新たな人間像」(「家康の書と遺品」展カタログ、徳川美術館・五島美術館、昭和五十八年)にも見られる。また、小松茂美は、藤原定家の尊重と定家流について、「藤原定家筆跡茶会使用例一覽(室町末期〜江戸時代)」を作成し、具体例を示す(『日本書流全史(上)』五七七〜五八三頁、講談社、昭和四十五年)。このなかには家康の事跡も含まれており、家康が定家の書を所持していたことを指摘している(同書五八四頁)。清水実「徳川家康とその遺愛品にみる文化的側面」(「徳川家康の遺愛品」展カタログ、三井記念美術館、平成二十二年)や名兄耶明「書の見方」(角川学芸出版、平成二十年)などにおいても、家康が定家の書に傾倒したことが指摘されている。

10 『史籍雑纂 第二』(統群書類従刊行会、昭和四十九年)所収。

11 徳川義宣が『徳川家康真蹟集』総論で指摘している。

12 『新訂増補国史大系三十八 徳川実記第一篇』(吉川弘文館、昭和三十九年)五七〇頁。

13 冷泉為満の履歴と文事について、小倉嘉夫「為満の流寓と冷泉家蔵書」(『冷泉家時雨亭叢書月報49』朝日新聞社、平成十四年)、大谷俊太「付論―冷泉為満と徳川家康―古今伝授の意味」(『和歌史の「近世」―道理と余情』ぺりかん社、平成十九年)を参考にした。

14 『大日本古記録 言経卿記六』(岩波書店、昭和四十四年)一四八頁。句点のみ付した。

15 「慶長日件録」第一(『史料纂集』、統群書類従完成会、昭和五十六年)二六六・二七頁。

16 この記事は姓のみの記載で正確に個人を特定することはできないが、生没年や位階、前後の記事などを参考に推量した。

17 大谷俊太「付論―冷泉為満と徳川家康―古今伝授の意味」。

18 「註9」参照。「定家様の流れ(早わかり)」(「定家様人物年表」(特別展「定家様」カタログ、五島美術館、昭和六十二年)。

19 新井栄蔵「古今伝授の成立―飯尾宗祇から御所伝授まで」(特別展「定家様」カタログ)一一二頁。

20 徳川義宣は、『徳川家康真蹟集』の解説で、紀伊徳川家伝来の一件が、徳川美術館に所蔵される遺墨に先だって揮毫されたものである

と推定している。

21 『徳川家康真蹟集』 図版編、一六六、一七〇〜一七二頁。この二件の遺墨の名称はこれに従った。

22 『徳川家康真蹟集』 解説編、九十二〜九十五頁。

23 『徳川家康真蹟集』 解説編、九十一・九十二頁。

24 『桃山の遊楽』 展カタログ（仙台市博物館、平成二年）、「吉野懐紙」解説。

25 比較表の文字の下のキャプションは、『徳川家康真蹟集』の図版番号であり、年号は制作年を示す。

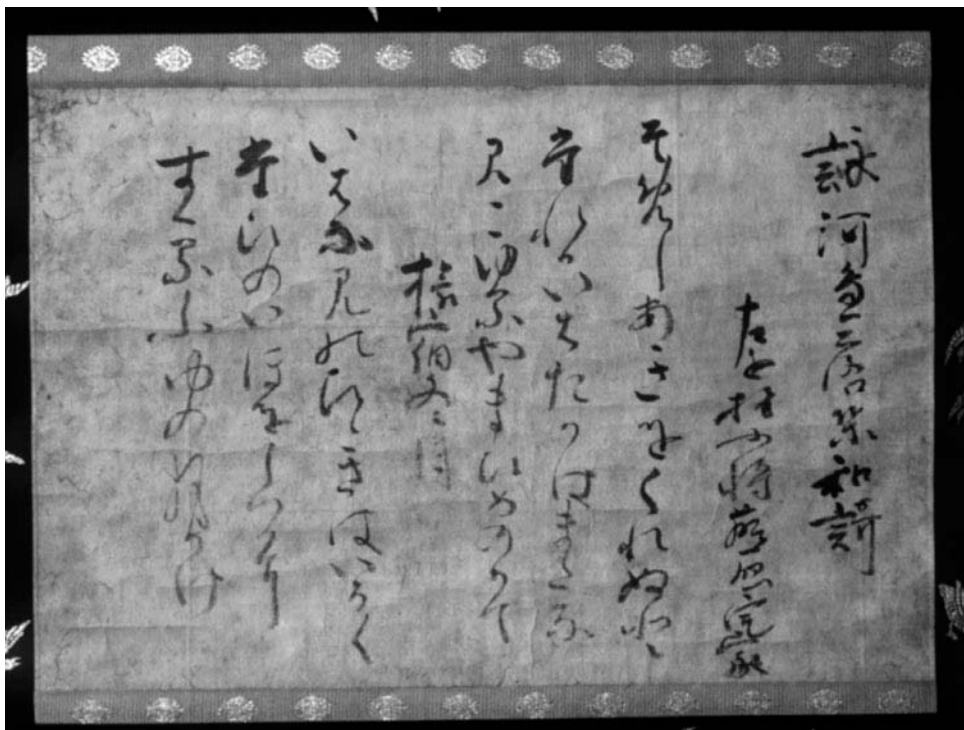
26 『徳川家康生誕四五〇年記念 家康の遺産―駿府御分物』 カタログ（徳川美術館、徳川博物館、平成四年）六十七、二三〇頁。

27 「註7」参照。

付記

本稿の執筆にあたって、元本学教授古谷稔先生に貴重なご意見を賜りました。心より御礼申し上げます。

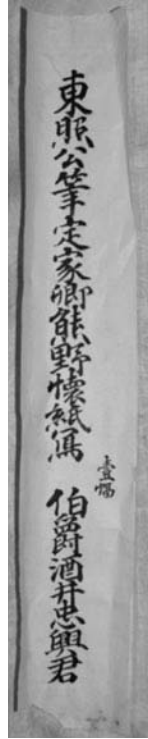
図一 模写本「熊野懐紙」本紙



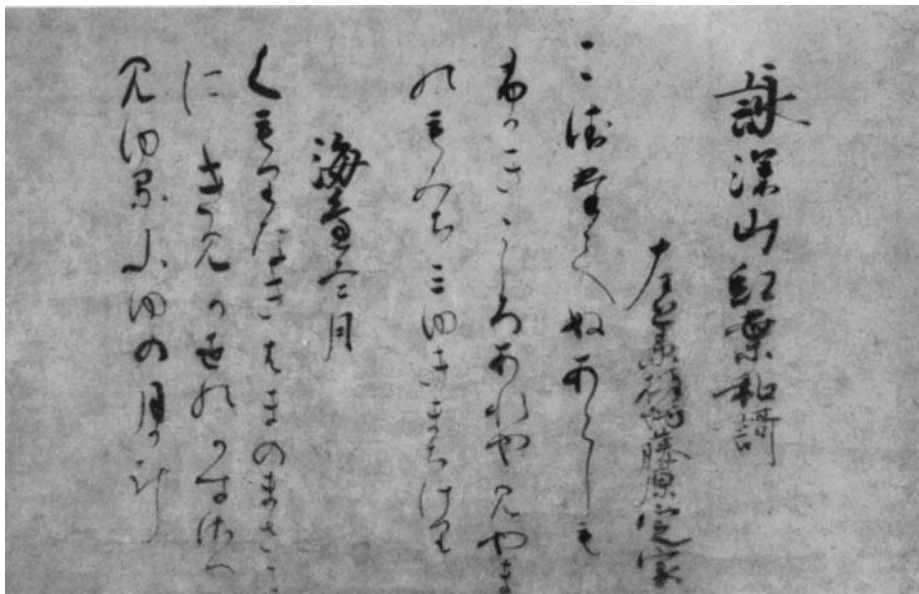
図二 箱書



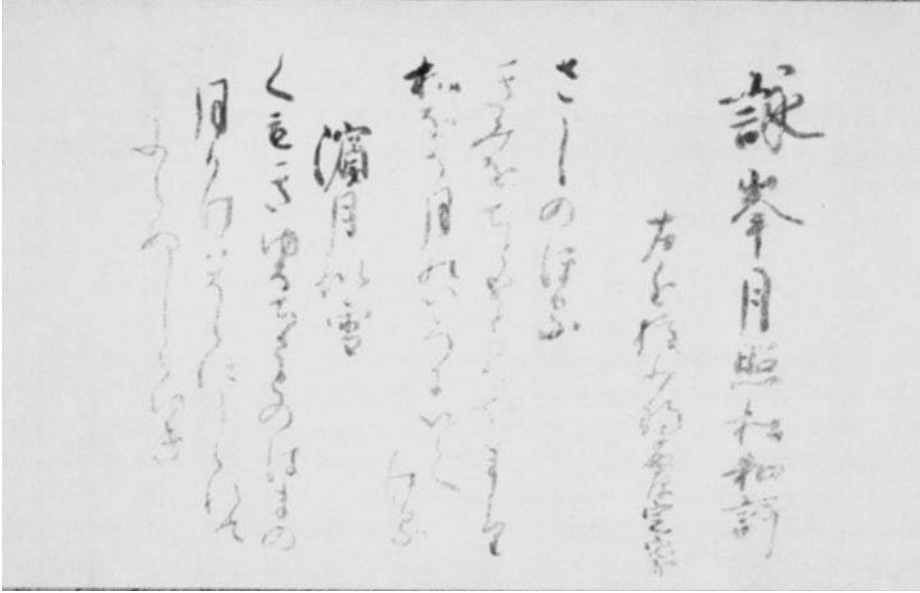
図三 付属紙片



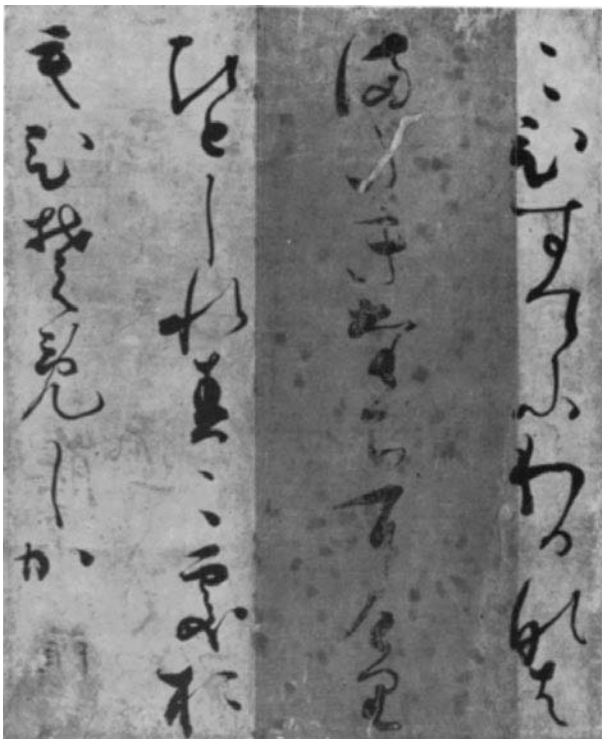
図四 藤原定家筆「熊野懷紙（深山紅葉・海辺冬月）」（公家と武家文化調査委員会編『熊野懷紙』六十五頁）



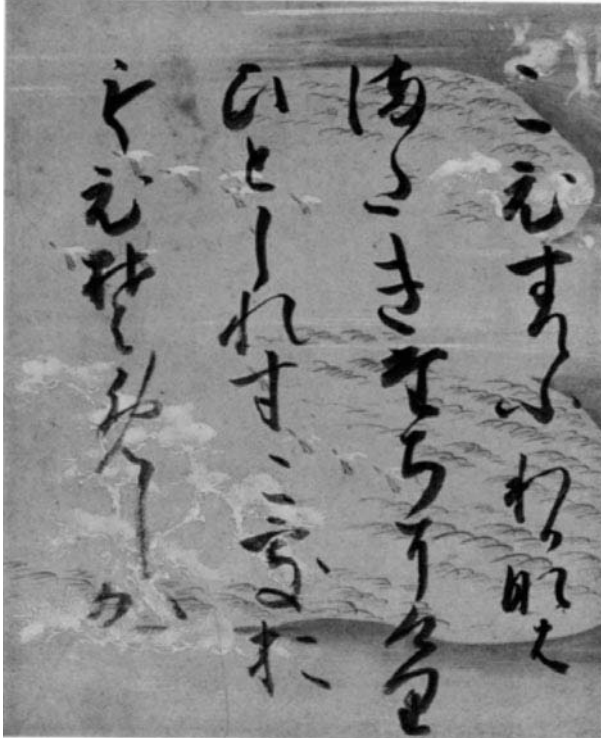
図五 藤原定家筆「熊野懷紙（峯月照松・浜月似雪）」（三井記念美術館・明月記研究会編『国宝熊野御幸記』口絵）



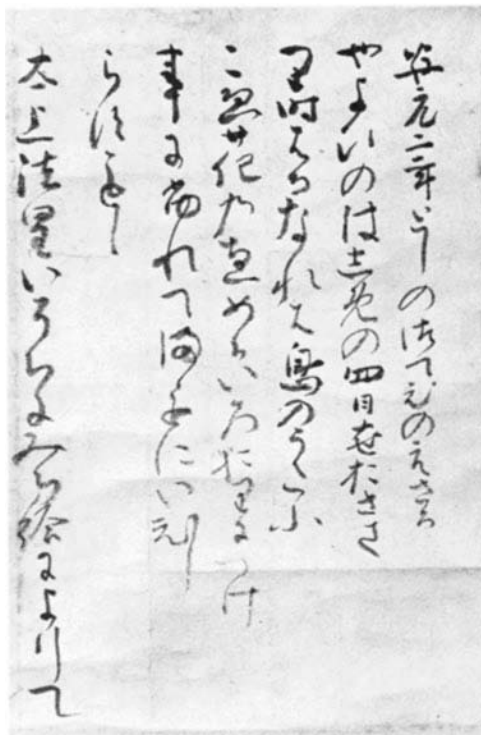
図六 藤原定家筆「小倉色紙（こひすてふ）」（『家康の書と遺品』展カタログ五十一頁）



図七 家康筆「模写本小倉色紙(こひすてふ)」(徳川義宣編著『徳川家康真蹟集』一六七頁)



図八 家康筆「模写本安元御賀記」(徳川家康真蹟集)一七三頁)



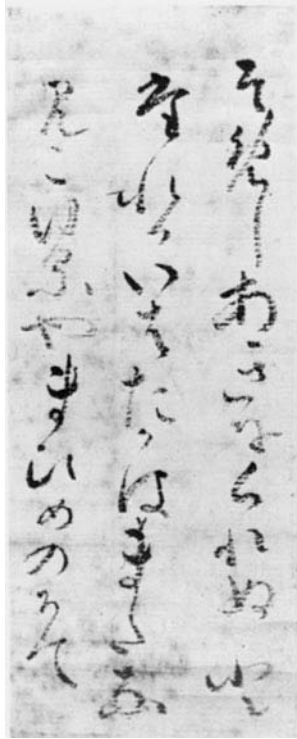
図九 家康筆「歌枕覚書」〔徳川家康真蹟集〕一七四頁

久 といふは たいは
 丁女は 川邊の あり
 けの 雲の せの あり
 外は ありのう あり
 からし たはば いら
 かりき かみか いら
 かりの ありの いら

図一〇 家康筆「僧正遍昭集手習」〔徳川家康真蹟集〕一七一頁

おはら なるし なるし
 いらん いらん いらん
 この いらん
 なる なる なる
 いらん いらん いらん

図一 家康筆「拾遺愚草手習」(徳川家康真蹟集)一六六頁)



図二 家康筆「吉野懐紙」(「桃山の遊楽」展カタログ 二頁)

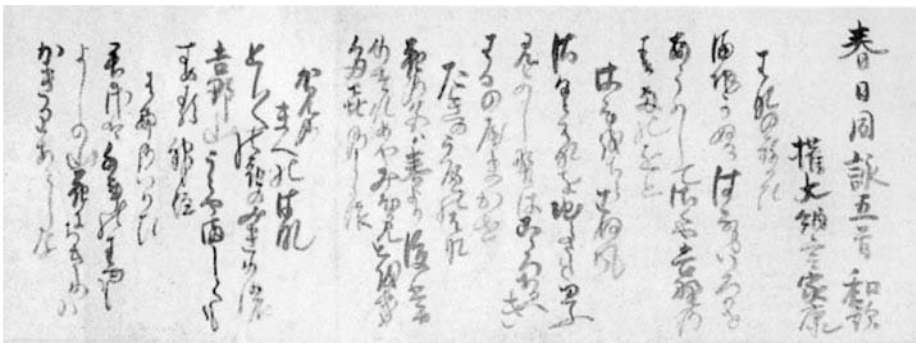



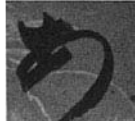


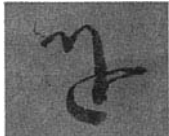









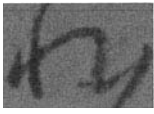
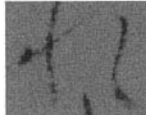
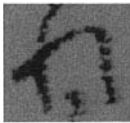



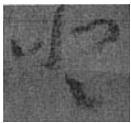







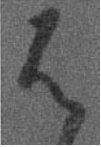








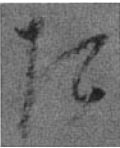


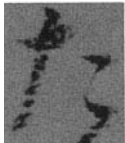


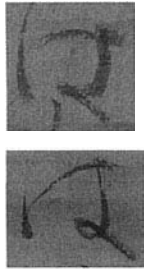


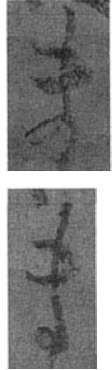
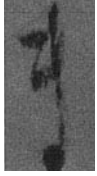








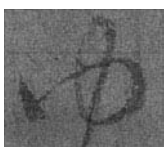
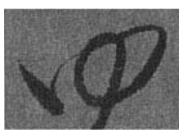
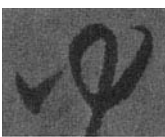


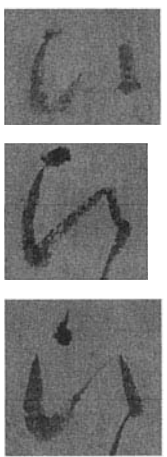
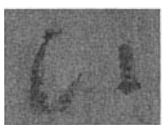
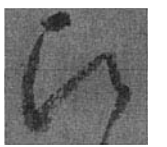
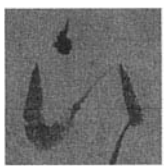
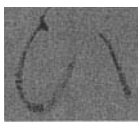



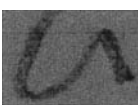



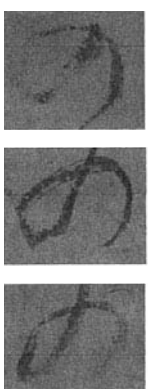



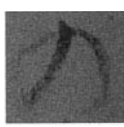
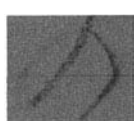





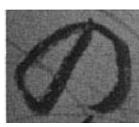
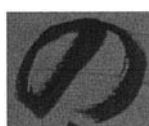





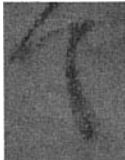




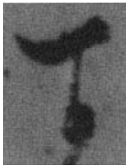



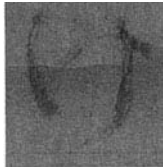





表1

	模写本「熊野懐紙」	署名や花押のある遺墨		署名のない短冊・色紙
あ		 7 書状 永禄 4	 43 書状 慶長 16	 118 和歌短冊
		 補 27 吉野懐紙 文禄 3	 補 27 吉野懐紙 文禄 3	
を	 	 40 書状 慶長 12	 108 和歌短冊  補 27 吉野懐紙 文禄 3	 105 和歌短冊  105 和歌短冊
れ	 	 35 書状 天正 19  補 27 吉野懐紙 文禄 3	 108 和歌短冊  43 書状 慶長 16  47 書状 元和 2	 105 和歌短冊  105 和歌短冊
と (登)		 108 和歌短冊		 105 和歌短冊

た (堂)		 109 和歌色紙	 124 小倉色紙写
は (者)	 	 33 書状 天正 15 ~ 16  38 書状 文禄 4 ~ 慶長 1  補 27 吉野懐紙 文禄 3  38 書状 文禄 4 ~ 慶長 1  108 和歌短冊  補 27 吉野懐紙 文禄 3	 101 和歌短冊  110 和歌詠草
た		 7 書状 永禄 4  39 書状 文禄 2 ~ 慶長 5  39 書状 文禄 2 ~ 慶長 5  43 書状 慶長 16  補 27 吉野懐紙 文禄 3	 104 和歌短冊

<p>は</p>		 補 27 吉野懐紙 文禄 3	 補 27 吉野懐紙 文禄 3	
<p>ま</p>		 7 書状 永禄 4	 40 慶長 12	 105 和歌短冊
<p>み (見)</p>		 35 書状 天正 19	 36 書状 天正 19	 105 和歌短冊

<p>ゆ</p> 	 	 <p>34 書状 天正 16 ~ 18</p>	 <p>34 書状 天正 16 ~ 18</p>	 <p>101 和歌短冊</p>  <p>106 和歌短冊</p>
<p>ひ</p> 	  	 <p>38 書状 文禄 4 ~ 慶長 1</p>  <p>45 書状 元和 1 頃</p>  <p>補 27 吉野懷紙 文禄 3</p>	 <p>45 書状 元和 1 頃</p>  <p>46 書状 元和 2</p>  <p>補 27 吉野懷紙 文禄 3</p>	 <p>110 和歌詠草</p>  <p>118 和歌短冊</p>
<p>の</p> 	  	 <p>33 書状 天正 15 ~ 16</p>  <p>33 書状 天正 15 ~ 16</p>  <p>40 書状 慶長 12</p>	 <p>33 書状 天正 15 ~ 16</p>  <p>37 書状 文禄 2</p>  <p>47 書状 元和 2</p>	 <p>101 和歌短冊</p>  <p>104 和歌短冊</p>  <p>104 和歌短冊</p>

		 49 請取状 永禄7~8	 補 27 吉野懐紙 文禄3	
		 補 27 吉野懐紙 文禄3		
て		 46 書状 元和2	 47 書状 元和2	 118 和歌短冊
す		 46 書状 元和2	 47 書状 元和2	 124 小倉色紙写
		 補 27 吉野懐紙 文禄3		
け		 7 書状 永禄4	 35 書状 天正19	 104 和歌短冊
		 38 書状 文禄4~慶長1	 46 書状 元和2頃	

和		  <p data-bbox="477 355 577 378">111 和歌手習</p> <p data-bbox="718 355 897 378">補 27 吉野懷紙 文祿 3</p>	
調・詠		 <p data-bbox="477 562 673 585">補 27 吉野懷紙 文祿 3</p>	
家		 <p data-bbox="477 770 673 794">補 27 吉野懷紙 文祿 3</p>	